Q20 自閉症・情緒障害とは

1 自閉症・情緒障害

情緒障害とは、情緒の現れ方が偏っていたり、激しかったりする状態を、自分の意思でコントロールできないことが継続し、学校生活や社会生活に支障となる状態です。

情緒が激しく現れることは、一般の子どもや大人にも起こることですが、多くは一過性で、すぐに消滅するのでほとんど問題にされることはありません。しかし、それが何度も繰り返され、極端な現れ方をして、社会的な不適応状態をきたす場合があります。そのような状態にある子どもは、特別な教育的対応が必要です。

情緒障害の現れ方としては、自分自身が脅かされると感じるなど、閉じこもるような傾向が強くなったり、適切な対人関係が形成できなかつたりする一方で、不安にかられて攻撃的になるような行動も見られます。さらに、多動、常同行動、チックなどとして現れる場合もあります。

情緒障害の原因としては、従来から、主として人間関係のあつれきなどの心理的な要因と、中枢神経系の機能障害や機能不全が想定されており、自閉症及びそれに類するものの原因は、中枢神経系の機能障害や機能不全であるとするのが定説になっています。

2 自閉症・情緒障害のある子どもたちの特性

<自閉症>

自閉症は、人への反応やかかわりの乏しさなど、社会的関係の形成に特有の困難さが見られます。言葉の発達に遅れや問題があり、興味や関心が狭く、特定のものにこだわるなどの特徴が、遅くとも3歳までに現れます。医学でいう広汎性発達障害に含まれる障害で、これらの特徴は、軽い程度から極めて重い程度まで見られ、一人一人の状態像は多様です。自閉症の主な特性として以下のことが挙げられます。自分から他人にかかわりを求めていくことが少なく、周囲の様子に無関心であるようにみられたり、表情や身ぶりから他人の気持ちを理解できなかつたり、他人と関係をもつことが苦手です。また、話し言葉に大きな遅れがみられ、相手の言葉の理解にも困難があります。アクセントや抑揚等が単調であり、言葉の出始めでは、即時反響言語（エコラリア）、あるいは独り言が多いといわれ、言葉の発達が遅れます。さらに、手をひらひらさせて指の間をのぞき込んだり、前後に身体を揺すったりといった常同行動や物の置いてある位置が少しでも違おうとすぐに気がついて直しに行くといった同一性保持の傾向もみられます。その他の特性として、感覚刺激への特異な反応や食生活の偏り、自傷等があります。

<選択性かん黙>

選択性かん黙とは、一般に、発声器官等に器質的・機能的な障害はありませんが、心理的な要因により、特定の状況で音声や言葉を出せず、学業等に支障がある状態です。選択性かん黙は、自閉症等とは異なり、言語を習得し、理解することには特別な障害はないことに留意する必要があります。原因は、一般に、集団に対する恐怖、人間関係のあつれきなどが指摘されています。また、その状態が著しい場合には、知的障害や自閉症などと区別しにくいこともあります。多方面からの調査を基にした総合的な判断が必要です。

<不登校>

不登校の要因は様々ですが、情緒障害教育の対象としての不登校は、心理的、情緒的理由により、登校できず家に閉じこもっていたり、家を出ても登校できなかつたりする状態です。本人は、登校しなければならないことを意識しており、登校しようと

することができないという社会的不適応になっている状態です。

一般的には、怠学や学校の意義を否定するなどの考えから、意図的に登校を拒否する場合は、学校に登校しないという状態は類似していますが、情緒障害の範ちゅうには含まれません。

<その他の情緒障害>

多動（自閉症による場合を除く）、常同行動、チック等が挙げられます。

3 学習場面や、日常生活での配慮・支援

○ 日常生活習慣

日常生活習慣を身に付けることは社会生活の基本です。一日の学校生活の流れを理解できるようにしたり、日課等を分かりやすくしたりして、心理的な安定を促し、固執性が目立たないように配慮しながら、生活に必要な諸技能を習慣として身に付けることが大切です。特に、学校と家庭との連携を密にすることでより確実に身に付けることができます。

○ 運動機能、感覚機能

動作の模倣、遊具や道具を使った運動等により、自ら身体を動かそうとする意欲を育て、協応動作等、運動機能の調和的発達を図るようにします。特に、視覚、触覚などを正しく活用することで目的のある行動を形成することをねらいとし、教材・教具を工夫します。

○ 言葉の理解

人の声に注意を向ける、人の話を聞く、返事やあいさつをするなどの必要な態度を形成し、人とのかかわりを深めるための基礎づくりをねらいとします。また、注意力や集中力を身に付け、言葉を理解するとともに、実際の生活に必要な言葉を適切に使用できるようにします。例えば、模型の電話やマイクを使って話すことなどの場面設定、創意工夫された絵カードや文字カード等の教材・教具等を活用します。

○ 人とのかかわり

一日の生活リズムを体得することにより、情緒を安定し、友達や教員と一緒に活動する喜びや楽しさを味わい、集団の雰囲気になれることをねらいとします。例えば、動作の模倣、遊び、劇、係活動など、いろいろな活動を通じて、集団での役割を理解し、相手の立場が理解できるようにします。

一人一人の児童生徒の学習の状況等に応じて、通常の学級での授業や特別活動に参加して交流を進め、人間的なふれあいを深め、集団参加が円滑にできるようきめ細かな配慮が必要です。

<自閉症>

生活習慣を身に付けたり、ルールの学習をしたり、コミュニケーションスキルを学んだり、個に応じた学習をします。抽象的・応用的な内容は不得手ですので、具体的に構成します。暗記することは得意なので効果的に取り入れます。

パターンの学習が得意です。途中で学習方法を変更しないようにします。視覚的な教材を使い、目標や目安をはっきり示し、本人との間でルールを決めることが大切です。

急に大声を出したり、泣き出したりしてパニックになった時は、適度に対応し、場所を静かな所に替え、落ち着くのを待ちます。教室を飛び出したり、動き回ったり、耳をおさえていたりする時などは、周りがかうさいと感じているのかもしれませんが、環境を見直して感覚過敏に対応します。偏食については家庭での様子を聞きとるなど、保護者と連携した取り組みを進めることが大切です。

初めてのことが苦手な場合が多いので、スモールステップで慣れるようにすることが大切です。

<選択性かん黙>

子どもの性格、発達の様子などの個人に対する配慮と教師や友だちとの関係等、環境づくりへの配慮が必要です。子どもが不安に感じないように心理的にリラックスできる場面をつくります。話すことを強要しないようにし、場合によっては、身振りやサインを決め、使うようにします。

好きなことや得意なことを見つけて、自信がもてるようにかかわり、話し始めても驚いたり、大げさにほめたりしないようにします。

専門機関やスクールカウンセラーとの連携をしっかりとります。

<不登校>

早期に発見するためには、子どもたちが発信するサイン（無気力、保健室に何回も行く、遅刻、早退、休日明けの欠席等）を見逃さないようにします。

ゆったりとした気持ちで子どもの話を聞いたり、「いつも気にかけている。」というメッセージを伝え続けたりします。

不登校の子どもたちの学ぶ場として、適応指導教室があります。場合によっては、心の教育センターとの連携が必要となります。